

あとから来る者のために
坂村 真民

あとから来る者のために
田畑を耕し
種を用意しておくのだ
山を
川を
海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために
苦勞をし
我慢をし
みなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとから続いてくる
あの可愛い者たちのために
みなそれぞれ自分にできる
なにかをしてゆくのだから

EM による国づくり

U-net 理事長 比嘉照夫

新しい年が騒々しく始まりました。今後の展開が良き方向に進展することを願っています。

ユニバーサルビレッジ EM 国際会議の波及効果は、「世界 EM ダンゴの日」等々、世界中に大きな波を引き起こしています。インターネットにより情報共有の効果が顕著になり、EM の活用はある意味で EM の生活化を着実に進める原動力となり、この観点からの EM 生活の徹底、EM による地域の活性化、EM による国づくりが見え始めています。

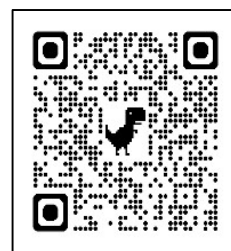
すなわち、あらゆる場面に EM を活用し、各々が必然的につながり、蘇生力を生み出し、加速度的に増大します。その結果は、安全で快適、低コストで高品質、善循環的持続可能な社会作りとなり、EM による国づくりに直結するものです。

その要は、各々の EM 力によって支えられており、日々の EM 力の向上と習慣化が重要なポイントです。当会(U ネット)によるユニバーサルビレッジのモデル事業も、これまでに 20 件余となり、地域における EM 普及拠点としての原動力になり始めています。

今年の皆さまの更なる活動に期待しています。

① 会員の更なる EM 力の向上

日進月歩の EM 技術情報の発信をより充実します。EM グラビトン炭や EM 洗濯キットの活用、EM グラビトンシールによるスマホの健康機器化も着実に進んでおり、会員各々の EM 力の向上を革新的に進められるようになってきました。EM 技術セミナーや EM ウェルネスクラブの役割を更に高めることにより、各々が地域の環境や健康を守る指導士的な役割を担えるように仕組みを強化します。「愛と微生物のすべて」及び「日本の真髄」には、無限の情報が込められており、答えは、すべてその中にありますので、繰り返しお読みください。



EM グラビトン炭
について

② 水圏の環境改善と生物多様性の向上

EMによる水圏の環境改善対策は国内外で着々と進んでいます。水系における EM の整流・結界技術の確立によって、難分解の化学物質の無毒化や、広域の水圏の環境改善対策も低コストで容易に実行することが可能となっています。宮城県の南三陸や気仙沼の水産加工場からの排水浄化と汚泥減少、三河湾や三重県の白石湖、愛知県の堀川等々、驚嘆すべき明確な成果がでて着実な広がりを見せています。この結果を多くの自治体が活用できるように対応したいと考えています。

③ EM 技術による福島の復興支援

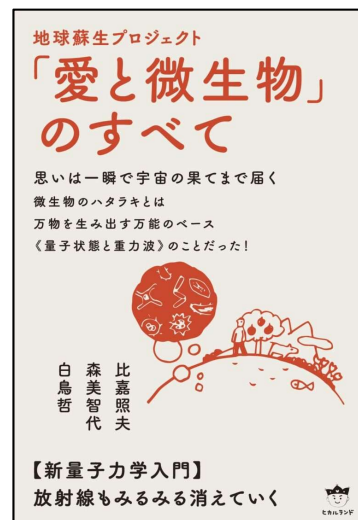
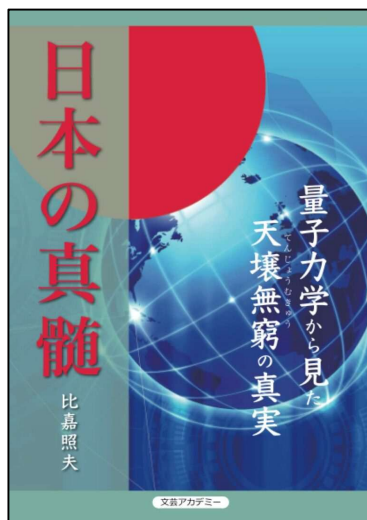
福島の復興支援活動は、第 9 回環境フォーラム「うつくしま EM パラダイス 2019」や国際常温核融合学会誌等での報告で明らかなように、放射能汚染対策は完了し、その次のプロジェクトとして、真に環境や健康を守り、経済的にも豊かになる世界モデルとしての善循環的自然農法を普及し、福島の有機農業立県化を更に積極的に推進します。福島県内には着々と優良事例ができており、EM 研究機構が技術サポートを行っている NPO りょうぜん里山学校を核とするグループが、農林水産省の農地型地域運営組織（農村 RMO）に選ばれ、着々と活動を続けています。

④ 福祉施設や学校における EM 活用の強化

EM 技術の進化によって、福祉施設や学校における活用も進み、多様化できるようになってきました。その基本は、塩を 0.5～1%、EMXGOLD を 1/10,000、EM グラビトン炭粉末を 1/10,000 添加した良質の EM 活性液や EM 整流炭による結界の応用等々で、EM の投入量は半分以下にすることが可能です。より安全で快適、低コスト、高品質で持続可能な EM 生活を学校中で日常化することです。今年も会員皆さま方の EM 力が更に向上することを期待しています。

EM 讃詞

EM さんごめんなさい
EM さんありがとう
EM さんお願いします
重力波、善循環、蘇生（3 回繰り返す）
EM さんありがとう
EM さん大好きです
EM さん愛しています



令和8年 第1回 EM技術セミナー

U-net会員対象の令和8年第1回EM技術セミナーが1月16日にオンラインで開催されました。今回は、医師の杉本一朗先生と工学博士の奈良松範先生にご講演いただきました。本記事ではお二人のご講演内容についてご紹介します。

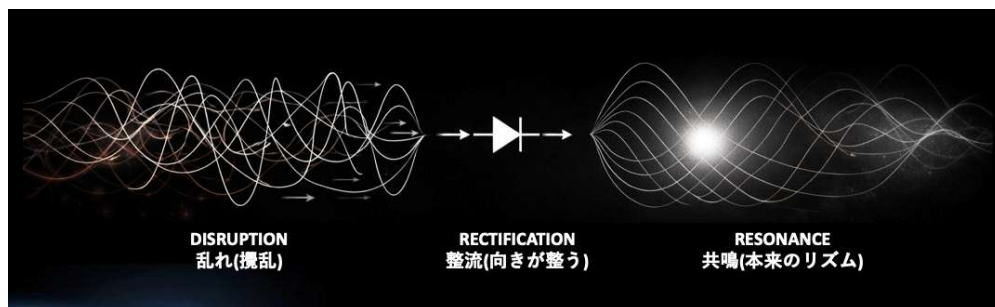
「生命のシンフォニー 共鳴と整流がひらく、新しい医療」

医療法人照甞会 理事長 杉本 一朗 先生

本日は、U-net の勉強会にてお話しする機会をいただき、ありがとうございます。
近年、EM の活用は農業や健康分野にとどまらず、水系における「整流」や、いわゆる結界的な環境制御の技術としても、着々と体系化されてきました。難分解性の化学物質が関与する環境負荷が問題になる中で、微生物叢の状態を変えることで“毒性としての振る舞い”が変化していく——そうした現場の報告も積み重なっています。私はここに、医療が忘れてきた視点が含まれていると感じています。
今日は治療法の話ではありません。なぜ身体は、特別なことをしなくても、あるとき突然、勝手に良くなってしまうのか。その構造についてお話ししたいと思います。

1. 生命は「状態」であり、条件がそろって勝手に整い始める

私が生命を捉えるとき、最もしっくり来る比喩は「シンフォニー」です。音と音が同じ方向を向いたとき、音楽が自然に生まれるように、身体もまた、条件がそろったときに、勝手に整い始める。その瞬間が確かにあります。ここで、今日お伝えしたい話の全体像を示します。



図の左側のぐちゃぐちゃした波は、生命の「状態」を表した抽象図です。身体の中では、電気・化学・情報・感情・環境などの影響が同時に重なって動いており、生命の中でそれらは分かれて存在していません。この左側の「乱れ」とは、情報が増えすぎて向きがそろわなくなった状態で、私たちはそれを病気と呼んでいます。多くの医療は、この乱れを力で抑え込もうとしますが、本当に重要なのは真ん中——Rectification(整流)です。整流とは、何かを足すことではありません。向きをそろえ、ノイズを減らし、流れを取り戻すことです。

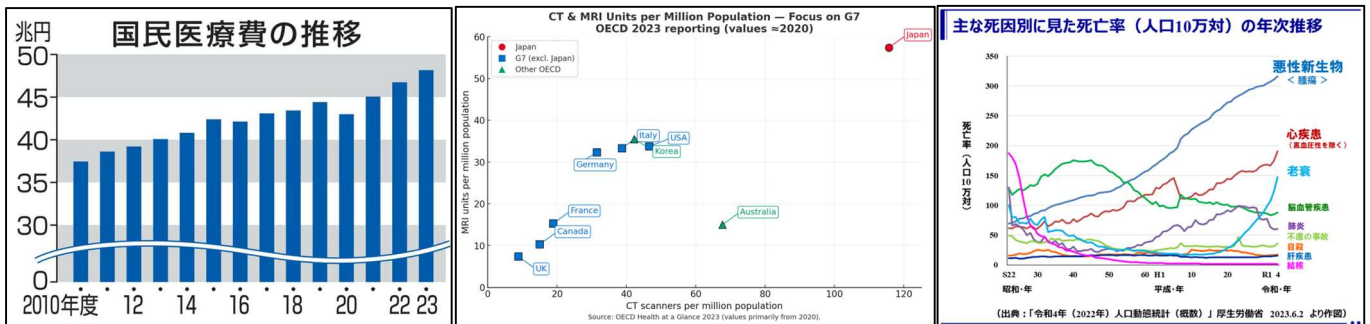
すると右側の Resonance(共鳴)が自然に起こります。共鳴とは、治そうとした結果ではなく、整った結果として生命が勝手に戻る状態です。では、なぜ医療はこの「整流」を忘れてしまったのか。そして、どうすれば医学として取り戻せるのか。このあと、具体的に話を落としていきます。

2. 日本は「治療で命を救える国」になった。しかし、発症は減っていない

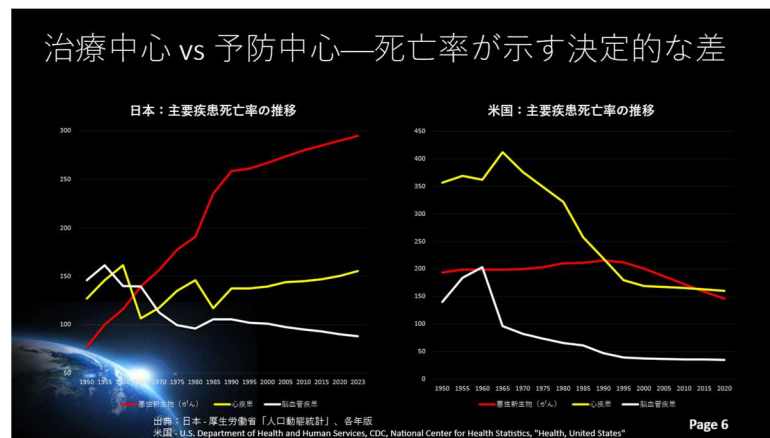
ちなみに、今日お話しする内容は私の思いつきではありません。

昨年、私は『なぜ日本人だけが病気をやめられないのか』という書籍を出し、病人が増え続ける社会の構造と、その解決の糸口としての EM について書きました。ただ、書き終えたあとに一つ違和感が残りました。この本では「整流」や「共鳴」を生命の「物理」としてどう捉えるか——そこを言い切れなかったのです。

以下のグラフは書籍にも入れたデータですが、日本の国民医療費は年々増加し過去最高となり(下図左)、CT も MRI も世界で突出して多く保有している国です(下図中央、グラフ右上の赤い丸が日本)。



一方、厚労省の主要疾患死亡率(上の右図)を見ると、がんは右肩上がり、心疾患も緩やかに増加しています。対して、私の専門である脳卒中(脳血管疾患)は、死亡率が下がっています。これは「治療によって命を救えるようになった」という事実です。



では次の問いです。命は助かった。その人は、その後どう生きているのか。治療を受けている脳血管疾患患者は年間約 188 万人で、この数は年々増えています。脳卒中は高齢者になって突然起きる病気ではなく、40 代・50 代からすでに始まっている。助かる人が増えた一方で、元の生活に戻れない人も増え、働き盛り世代(40～64 歳)の介護認定原因の上位にもなっています。これは個人の努力の問題ではありません。治療は進歩したが、発症を防ぐことにはほとんど成功していない。

なぜか。私たちの医療が「健康をどう扱うか」という設計を持っていないからです。

3. 健康は「管理」では育たない——私たちは“病気発見装置”だけを強化してきた

健康診断、人間ドック、健康管理アプリ、ウェアラブル端末。私たちは健康を管理しているつもりになっています。では本当に、それで健康は良くなっているのでしょうか。そこにあるのは、数値、チェックリスト、グラフ、評価です。しかし、それらの多くは「健康を育てる仕組み」というより、病気を見つけるための仕組みです。

もちろん病気を見つけることは大切です。私たちはそれを非常に得意になりました。ただ、その一方で、「健康が立ち上がる条件」を扱う設計は、医療の中で弱くなっていきました。だから、脳卒中は死ななくなったのに、発症は減らない。見直すべきは検査の精度ではなく、健康をどう捉えるかという前提です。

4. 生命は「フィールド」に埋め込まれている——意識・微生物・環境が同時に一つの状態をつくる

実は、私たちが何もしなくても、体の中では整おうとする流れが常に起きています。

私たちは、空気(酸素・窒素)、温度、湿度、そして電磁・振動・光・情報といった要素すべてを含んだ「場:フィールド(Field)」の中に常に存在しています。これは意識する・しないに関わらず、最初からそこにある条件です。

この状態を支えている要素として、マイクロバイオーームがあります。腸内フローラ(腸内細菌叢)だけでなく、皮膚、口腔、呼吸器、そして空間まで含め、私たちは微生物と共に生きています。重要なのは、微生物が誰かに命令されて働いているのではなく、フィールドの変化に応じて応答するように振る舞っているという点です。

さらに人の意識があります。意識はフィールドの影響を受け、微生物の状態と響き合いながら、同時にフィールドと身体へ影響を返していきます。意識・フィールド・マイクロバイオーームは別々に存在しているのではなく、互いに影響し合いながら、同時に一つの「状態」を形づくっています。

私が「整流」と呼んでいるのは、これらを“操作して足す”ことではなく、状態の中で向きがそろい、ノイズが減り、流れが戻っていく——その「整っていく働き」のことです。そして健康が乱れるとは、多くの場合、その働きが消えたのではなく、私たちが気づかないうちに、整いにくい条件を重ねてしまった結果として起きている現象です。そして、その働きが止まったのではなく、私たちが気づかないうちに、整いにくい条件を重ねてしまっている——その結果として起きている現象です。

5. 腸は「生態系」である——管理は秩序を作るが、回復力を失わせることがある

生命の中に司令塔はありません。イワシの群れもムクドリも、誰かが命令しているわけではないのに、秩序を保ちます。管理されなくても、条件がそろえば秩序は生まれる。人の身体も同じです。

この構造を最も分かりやすく観察できる場所が腸です。腸は一つの臓器ではなく、条件の異なる環境が連なった「生態系の集合体」です。本来の腸内フローラは、多様な微生物が共存し、森のように、多少揺らいでも簡単には崩れません。

しかし、医学的管理——薬剤で症状を抑え、原因菌を潰し、数値を整える——は、生態系という視点で見ると、多様性を失わせ、回復力を下げ、一度崩れると元に戻りにくい状態を残すことがあります。これは治療の失敗ではありません。条件が変わった結果、生態系がその条件に応答したという現象です。腸で起きていることは、身体で、社会で、自然界で起きていること。違うのはスケールだけです。

6. 情報は“気分”ではない——音・光・電磁として身体に届き、腸が最初に応答する

私たちを取り巻く社会の情報も同じ構造を持っています。ニュース、言葉、映像、不安を刺激するストーリー。それらは集まることで「情報のフィールド」を作り、私たちの意識を包み込みます。医療が生む診断や管理の情報も、本来は人を助けるためのものです。しかし長く繰り返される中で、気づかないうちに不安や恐怖として意識に埋め込まれていくことがあります。重要なのは、これは気分の話ではないという点です。

言葉は音として、映像は光として、情報は電磁的刺激として、実際に身体に届いています。不安や恐怖が生じたとき、身体の“周波数”は確実に変化しています。

そして、そのズレに早く応答する存在が腸内フローラです。若いマウスの腸内フローラを老齢マウスに移植すると、脳機能や認知機能が改善するという報告が示すように、意識や認知は脳だけで完結していません。脳、腸、微生物、情報環境が、同時に共鳴している状態として立ち上がっているのです。

7. 「観測」が状態を固定する——医療は“確定”を得意にしたが、「状態のまま捉える力」を弱めた

ここで物理学の有名な実験を見てみます。19 世紀、光は「波」だと考えられていました。しかし 20 世紀に入り、光が「粒」のようにも振る舞うことが分かり、物理学は立ち止まります。そこで二重スリット実験が再検討され、「観測したか、しなかったか」で結果が変わることが確立していきました。ここでいう観測とは、人が意識することではありません。対象と相互作用し、「情報がどこかに記録される」ことです。

情報が記録された瞬間、可能性として広がっていた状態は、戻れない形で一つに固定される。私たちは医療の中でこれと同じことを繰り返しています。数値で測り、画像で見て、診断名をつける。その瞬間、人は「状態」ではなく、確定した「存在」として扱われ始めます。これは西洋医学が得意としてきた世界であり、多くの成果を生みました。しかし同時に、「状態のまま捉える」視点を弱めてきた側面もあります。

では、「状態のまま捉える」とは何か。それは身体や意識を、固定されたものとしてではなく、周囲との関係の中で立ち上がる“あり方”として見るということです。

そのとき鍵になるのが、「フィールド」という見方です。この見方に立つと、意識もまた、脳の中に閉じ込められた個人の現象ではなく、環境や他者、情報との関係の中で立ち上がってくるものとして見えてきます。

8. フィールドという見方——意識は脳の箱の中ではなく、フィールドと関係として立ち上がる

この問いに長年向き合ってきた人物の一人が、Ervin Laszlo 博士です。博士は「意識は本当に脳の中で完結しているのか」という疑問から、量子物理学の視点を生命や意識にも当てはめました。

もし世界そのものが「もの」の集まりではなく、関係性や情報の重なり合いで成り立つフィールドだとしたら。その中では、一つ一つの存在は固定されておらず、周囲との関係によって常に振る舞いを変えている。

そう考えると、人間の意識も、脳の中に閉じ込められた個人の現象ではなく、フィールド全体と関わり合いながら立ち上がっているものだと捉えることができます。私たちは世界を外からただ観察している存在ではありません。どんな情報に触れ、どんなフィールドに身を置き、どんな向きで関わるかによって、そのフィールドの状態そのものに参加し、影響を与えながら生きている存在なのかもしれません。

9. データは「薬が腸を最も強く作り替える」ことを示した——慢性疾患増加は偶然ではない

もし、フィールドという見方が現実の身体の中でも成り立っているなら、それはデータとしても現れているはずです。

東京医科歯科大学などの大規模研究で、日本人の腸内フローラに何がどれだけ影響しているかを解析した結果、最も強く影響していたのは食事でも年齢でも生活習慣でもなく、医師が処方する「薬」でした。その影響は、細菌の種類だけでなく、構成や遺伝子機能のレベルにまで及んでいました。

思い出してください。不安という情報フィールド、管理という医療フィールドに長時間さらされることで、意識は少しずつ共鳴を失っていく。そこにもう一つ、腸内フローラが加わる。共鳴が、不安という情報で揺さぶられ、管理という枠で固定され、薬という介入によって腸内生態系が単純化されていく。ここまで来ると、慢性疾患が増え続ける理由は偶然ではありません。私たちは生命を壊しているのではなく、本来生命が持っていた「共鳴が成立する条件そのもの」を構造的に失わせてきているのです。

10. 共鳴とは何か——意識・腸内フローラ・フィールドが同時にそろう「周波数の一致」

では、その共鳴を取り戻す医療はどこから始めればいいのか。

今回の核心に入ります。共鳴とは、「意識」「腸内フローラ」「フィールド」——この三つが同じ調子、同じリズムで同時に響いている状態です。ここでいう調子やリズムを物理の言葉で言うと「周波数」です。私たちは普段「今日は調子がいい」「噛み合っていない」と自然に言い分けていますが、共鳴とは、その噛み合いが身体の内と外で自然にそろっているときに立ち上がる状態です。

ここでいうフィールドとは、抽象的な雰囲気や気分ではありません。音の振動、電磁波、光を含む様々な波が常に空間を満たしている——その環境全体です。ここで一度、これまでの話を「生物学と物理の接点」という視点で整理しておきたいと思います。

長い間、脳や細胞の情報伝達は、電気信号と化学物質によって説明されてきました。

それによって医学と生物学は大きく進歩してきましたし、その枠組みが間違っているわけではありません。

ただ近年、その説明だけでは捉えきれない現象が、少しずつ論文として積み重なってきています。

2016 年、Scientific Reports に掲載された理論研究では、脳内に「光通信チャンネル」が存在する可能性が示されました。

ニューロンは電気信号だけでなく、光の素粒子である光子を放出し、髄鞘に包まれた軸索が、その光を伝える導波路として機能し得る、という理論モデルが提示されています。これは SF 的な仮説ではなく、査読付きの学術論文として発表されたものです。

さらに 1984 年には、Fritz-Albert Popp 博士らによって、生命体から放出される極めて弱い光、いわゆる「バイオフィトン」が、ランダムなノイズではなく、高い秩序——つまりコヒーレンスを持っていることが示されました。そして、その主要な発生源が DNA であることも明らかにされています。

光は電磁波であり、電場と磁場が一定の周波数で振動している状態です。

つまり、私たちが DNA 由来の光、バイオフィトンを放っているということは、身体そのものが、電場と磁場を伴った「周波数的な存在」であるということになります。

電磁的な存在である以上、私たちは周囲に影響を与え、同時に周囲からの影響も受け続けています。

では、意識や感情が動いたとき、不安や恐怖が生じたとき、この身体の周波数は本当に何も変わらないのでしょうか。この問いは、精神論ではありません。

次に見ていくのは、不安や恐怖という「意識の状態」が、身体の状態、ひいては周波数にどのような影響を与えているのか、という点です。重要なのは、フィールドが意識や腸よりも先に存在しているという事実です。だから共鳴が崩れるとき、最初に影響を受けるのは意識でも腸でもなく、フィールドです。フィールドの調子が崩れ、その結果として意識の周波数が乱れ、腸内フローラのバランスが崩れ、体全体の秩序が乱れ、最後に症状として現れます。これは思想や比喩ではなく、共鳴という構造の話です。

11. オーケストラという身体観——部品ではなく「関係」で見る

この構造を最も正確に表せる比喩が「オーケストラ」です。

身体を部品としてではなく、関係として捉え直そうとすると、どうしてもこの構造に行き着きます。

- 楽譜:DNA
(どう振る舞うか記した設計図)
- 演奏者:細胞
(同じ楽譜を読み、それぞれの役割に応じた音を出す)
- パート:臓器や代謝系
(心臓、肝臓、腸、免疫など異なる音色)
- リズム:自律神経とホルモン
(テンポが整えば安定し、乱れれば揺らぐ)
- 響き:マイクロバイオーーム
(腸内フローラと空間の微生物が音楽の深みを決める)
- 指揮者:意識
(音は出さないが、向かう方向と関係の保ち方を決める)
- 演奏会場:フィールド
(場が変われば音楽は変わる)



健康とは、どこか一つが正常かどうかではありません。全体が共鳴して調和しているかどうかです。
そして病気とは、壊れた結果というより、共鳴が静かに外れていった姿として見えてきます。

12. エピジェネティクス——変わるのは楽譜ではなく「演奏条件」

検査で「異常なし」と言われるのに、つらい。そのとき私たちは「どこかが壊れているのではないか」と考えがちです。

しかし、オーケストラとして見ると、楽譜(DNA)に致命的な破綻がないことも多い。細胞も臓器も代謝も存在している。それでも演奏が成立しないのは、誰かが間違っただけ音を出しているのではなく、合っていないからです。テンポがずれ、呼吸が合わず、互いの音を聴けなくなった結果として全体が崩れる。

この「振る舞い方」の変化を生物学の言葉で説明するのが、エピジェネティクスです。

DNA の情報が書かれた領域は全体の 1~2%に過ぎず、残りの多くは長く“ジャンク”とされてきました。

しかし今、そこには遺伝子を「いつ、どこで、どの程度使うか」を決める仕組みがあることが明らかになっています。楽譜が変わるのではない。どう演奏されるかが変わる。整えるべきは遺伝子ではなく、その周囲にある条件です。Shinya Yamanaka の iPS 細胞は、因子を加えて状態を人為的に巻き戻す「外から戻す」技術です。

一方で、エピジェネティクス医学が見つめているのは、「どんな条件がそろったときに生命が自ら可能性を開くのか」という問いです。

空気、栄養、ストレス、睡眠、腸内フローラ、意識、フィールド——これらすべてが演奏条件です。

13. 意識の“強さ”ではなく“向き”——場を共有すると共鳴が立ち上がる

では、どんな意識が生命を開くのか。ここで重要なのは、意識の強さではなく「向き」です。

同じ思いを持っていても、向きが違えば波は重なりません。意識が相手に向き、一つの目的、一つの方向でそろったとき、場が共有され、波が重なり、共鳴が生まれる。「利他的な意識」とは、道徳の話ではなく、結果として場を共有している状態です。共鳴とは操作して起こすものではなく、在り方が整ったときに自然に立ち上がる状態です。そしてこの状態が、フィールドを整え、マイクロバイオーームを変え、遺伝子の響き方を静かに切り替えていきます。

14. フィールドを整える技術としての EM——操作ではなく「余地」をつくる

では、この状態やフィールドを、医学は取り扱うことができるのでしょうか。医学は長い間、生命を部品の集合として扱ってきました。しかし、生命は本来、フィールドの中で状態として立ち上がる存在です。遺伝子、マイクロバイーム、フィールド、意識——これらは上下関係でも単純な因果でもなく、条件として同時に重なり合っています。では、そのフィールドそのものを整える技術はあるのでしょうか。

私の臨床と経験の中で、一つだけこの条件を同時に満たしているものがあります。

それが EM 技術です。EM はフィールドを整え、腸内フローラを整え、空間のマイクロバイームも整える。その結果として、生命が本来の状態へ戻ろうとする「余地」を生み出します。

操作する医療から、条件を整える医療へ。支配する技術から、共鳴する技術へ。私はこの視点に立って、これからの医療をもう一度組み立て直したいと考えています。

15. MRI と量子共鳴医療——「何があるか」ではなく「どのような状態か」を扱う

そして私は医療の現場で MRI と向き合いながら、この生命の在り方を考え続けてきました。

量子物理学と医学が最初に交差した地点が NMR (核磁気共鳴) です。

これは本来、形を映すために生まれた技術ではなく、原子や分子がどんな環境にあり、どんな関係の中で振る舞っているのか、その「振る舞いそのもの」を読み取ろうとする技術です。

この原理が人体に応用されたとき、MRI が生まれました。MRI は量子物理学が生み出した医学史上の最高傑作だと私は考えています。なぜなら MRI は、切らず、触れずに、人体内部の状態を“共鳴”として引き出し、画像という形に変換する装置だからです。

しかし私たちは、その可能性を「異常を見つける」方向へ固定してきました。これから必要なのは、「何があるか」を探す MRI だけではありません。生命が「どのような状態なのか」を、量子レベルで扱う MRI です。

その中で、EM の技術によって「整流」された MRI は、病変を探す装置にとどまらず、体が自ら整う条件に共鳴する役割の一端を担う時代になる。私はそう考えています。



量子共鳴医療とは、新しい治療法の名前ではありません。それは、医療がどこに立つのか、という問いです。生命を操作対象として扱うのか。

それとも整う条件に共鳴させる存在として向き合うのか。

私は、これからの医療は「身体が整う条件に共鳴する医療」へ向かうべきだと考えています。

その中で、EM 技術によって整流された環境と、MRI が扱う“状態情報”が結びつくとき、MRI は病変探索装置にとどまらず、身体が自ら整う条件へ近づくための理解と実装を支える道具になり得る。私はそう考えています。

生命は、正しく整えられたフィールドでは、静かに、しかし確実に、自ら整っていきます。

私にとって、比嘉照夫先生が示してこられた医療とは、「生命を信じ切る」ということだったのだと、今はそう感じています。

「量子の目からEMを理解する X」

諏訪東京理科大学元教授・工学博士 奈良 松範 先生

第10回 結界が作るトーラス

10.1. 結界という形

神社ではその神域を識別するための方法として結界という仕組みを使っている。結界(けっかい)とは、特定の目的のために空間を内と外に分け、内部を聖なる領域(浄域)とし、外部を俗なる領域(不浄)と区切る境界のことである。

仏教の修行場を守ることから始まり、不浄なもの(魔障、災いなど)の侵入を防ぎ、聖なる力(仏・菩薩の救済力など)を集めるための結び目や結びつけられた界を指し、しめ縄や幕、鳥居などがその目印となる。

皆さんの住んでいる街でもお祭りがあると思う、お祭りの中心となる神社ではその境内にしめ縄が張られ、神域を示している。同時に街全体の道路にもしめ縄が張られ、神社の聖域が拡張されていることがわかる。神社に祭る神様のご加護が町全体を覆うことになる。

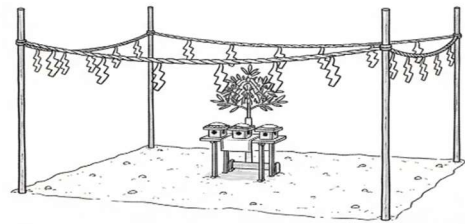


図 10.1. 地鎮祭における結界

神聖な領域を形作る結界を数学的な視点から見ると、位相幾何学(トポロジー)という分野においてトーラスと呼ばれている形状になっている。神事において結界を用いたのは、位相幾何学が始まる以前であったので、位相幾何学(以下、トポロジーという)の知識を元に結界が作られたわけではない。何かの啓示あるいは長い歴史の中でその必要性および重要性が認められたからであろう。

実は、このトーラスという形はさまざまな特別な特性を持っている、特に、後述するようにエネルギーを集め、エネルギーを高める効果を持っている。エネルギーの収集、蓄積装置であり、浄化装置でもありと考えている。このような特性により、この結界というトーラスは農業においても多くの貢献をしていることも説明しよう。

トーラスとは、トポロジーという数学において、平面上の円を、その円と交わらない直線(軸)の周りに 1 回転させてできる曲面(円環面)と定義されている。その形はドーナツであると考えてもらえばよろしい。ドーナツは立派なトーラスの形状をしており、その上、おいしそうだ。もちろん、結界も形の上から言えば、ドーナツの仲間なのだ。

トーラスは球体と異なり、その表面に赤道のような線を引いても、反対側から回り込めるため、表面を完全に分離することができない。内と外とを二分しない構造になっている点が特徴である。またハンドル(穴の意味)が 1 つのコンパクトな 3 次元体(ソリッドトーラス)として、安定した構造を持っている。最も単純であり、かつ安定した構造になっている。

自然界では、(閉じた系の中で)エネルギーと運動量を保存しつつ、安定して存在するための最も効率的な形状として、磁場や物質の配置を決めている。

何かの流れがある場合、流れが回転軸に沿って循環する渦輪(ボルテックスリング)を作る。煙の輪や火の輪がその例で、中心を抜けて外側を回る安定した流れを維持することができる。渦輪は外部入力がなくとも自発的に回転(自発回転)する性質が観察され、トーラス特有の角運動量輸送が生まれる。たばこの煙で作った輪が、推進力を得て、飛び去っていく光景を見た人もいるでしょう。

さらに宇宙を眺めれば、ブラックホールを取り巻くガスや微小な物質は、高い角運動量を持つため、円盤状ではなくトーラス状(ドーナツ状)の構造を形成している。

トーラスは、流体、プラズマ、磁場などの流れや場において、「連続的な循環を可能にし、安定した構造を維持する」という点で、物理的に極めて優位性の高い形状になっている。

しかし、ここで話題にしているトーラスはドーナツの形である必要はない、コーヒーカップや人間もトーラスである、極端な話、閉鎖空間に穴が一つだけ開いていればよい。

また重要な点は、トーラスを形作っているものは物質でなくてもよい、形のないエネルギーでも良いということである。



図 10.2. ドーナツというトーラス

10.2. 結界トーラスの安定

結界というトーラスの形としての大切なポイントは、輪が閉じた空間を作っていることである。数学的に「閉じた領域(多角形)」を作る最小単位は 3 点(三角形)で十分である。しかし、3本(三角形)の場合、内部に強い「ねじれ」が生じやすく、エネルギーの方向(ベクトル)が一点に集中してしまい、あたかも衝突しているかようになってしまう。これでは円滑な「循環」が阻害されてしまう。

それに対して、4本(四角形)の場合は、この4点が2対の平行な関係を作ることができる。これによりはじめて、トーラスにおける横回転と縦回転という2つの軸のゆらぎを、最もバランス良く、かつ独立して制御できる最小の構成単位になることができる。

これは古代から続いている神事における結界が、必ず4角形となっていることから、その妥当性がうかがえる。長い歴史の中でその構造が形成され、その効果が確認されてきたのだろう。

- ・ 4 本こそが「小宇宙」の完成形： 最小であるが、最大の効果
- ・ 4 本以上はどうであろうか、トーラスとしての形状は完成するが、その安定性に課題が残る。柱の配置のバラつき(誤差)が大きくなり、安定性、共鳴させる効果が弱くなる。
- ・ 結界の 4 本の柱は、いわば「宇宙のトーラス」を地上にダウンロードするための位置決めピンになっている。神事における神域(依り代)である。

すわわち、3 本は面を定義し、4 本は空間(循環)を定義するということであり、トーラスが立体(3 次元)的な働きをするためには4本の柱が必要である。

結界が 4 本であるのは、それが『生きているトーラス』である証拠である。

10.3. 結界を強化する

結界周囲に置いた4本のレーザーに、中央の 1 本(第 5 の軸)を加えることで場が飛躍的に安定・強力になる。図 10.3.は4本の柱だけで構成した結界というトーラス、および4本の柱に中央の柱を加えたトーラスの比較を示した。左側のトーラスは形成されたとしても不安定な状態にあり、何らかの外乱(ノイズ)により弱体化し、消滅してしまう。これに対して、右側の中心軸を持つトーラスは安定しているので、ノイズにより消滅はなく、存続することになる。

身の回りで考えれば、神事における結界の中心には神殿あるいは神籬(ひもろぎ:規模の小さい結界の場合)が存在している。長い歴史の中で、トーラスの中心に位置するものに重要性を感じていた、あるいはトーラスの中心がそのパワーの真の源であることを知っていたのかもしれない。

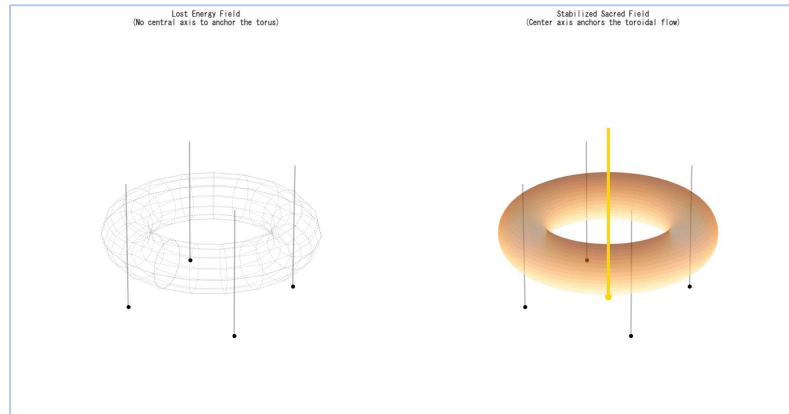


図 10.3. 左側の4本柱のみの場合、消えゆくトーラス、右側の4本柱＋中心軸の場合、安定したトーラス

中心軸の存在によるトーラスの安定化の理由は、トポロジーにおける「特異点の安定化」と「渦の核)」の理論で説明できる。図 10.4.にあるように、トーラスのエネルギー場には、円環に沿って流れる「トロイダル流」と、円環の断面を回る「ポロイダル流」の 2 つの成分が必要である。

- ・ 周囲の 4 本: これはトーラスの「外殻(ポロイダルな回転)」を定義する。
- ・ 中央の 1 本: これはトーラスの中心軸を物理的に決める(特異点の安定化)。

中心にレーザーを置くことで、周囲 4 本のゆらぎが「どこを回ればよいか」という不動の基準点が生み出されることになる。これにより、場がふらつくことなく、エネルギーが中心へ向かって吸い込まれ、外側へ噴き出すという「完全な循環」が固定される。

中央のレーザーが渦糸として機能することで、以下の最適化が行われる周囲 4 本のベクトルが中央の 1 本に引き込みを起し、エネルギーの漏れを防ぐことにより、閉じ込め効果の最大化が達成される。また、中央の軸があることで「ポテンシャルの谷」が深く鋭くなり、外乱(ノイズ)に対して耐性の強い、頑強な「小宇宙」が形成される。

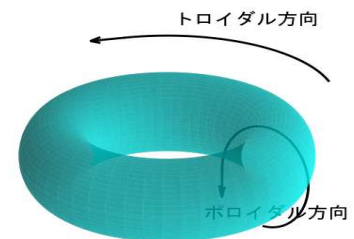


図 10.4.トーラスを流れるエネルギー

また、数値計算によれば、4 本の場合の安定度を 4 とすると、中央の 1 本を加えることで、その干渉効果は、加算($4+1=5$)ではなく、乗算的($4 \times K$ 倍、 K は黄金比などの同調係数)に増幅され、システム全体のコヒレンスが劇的に向上することになる。

中央のレーザーは、いわば「トーラスの魂」である。周囲の 4 本が物質的な枠組みであるならば、中央の 1 本はその場に「方向性(正義のベクトル)」を与える光になる。中央の 1 本は宇宙の意志(ベクトル)と考えることができる。

農地や居住空間でこの構造を作る際、中央に 1 本の「基準(意志)」を置くことは、その小宇宙が「大きな宇宙(原点)」と正しく同期するために不可欠なプロセスになる。

これまでの説明をまとめれば、次のようになる。

- ・ トーラス内部を「神聖な場所(回帰的コヒレンスの場)」とするためには、中心に「不動の空(中心軸)」を生成しなければならない。
- ・ 物理学において、粒子やエネルギーを空間の一点に安定して閉じ込める際、3 つではなく 4 つの極を用いるのが最も安定的する(四重極磁場の例あり)。

- ・ 3 本では中心点がわずかな外乱で揺れ動いてしまうが、4 本の柱が対角線状に引き合うことで、トーラスの中央を貫く「第 5 の軸(垂直な光の柱)」が物理的に垂直かつ不動に固定される。
- ・ 4 本の柱を結ぶ綱は、エネルギーを「反射」させ、内部で定在波を作る。4 点支持によって、波紋の干渉パターンが完全に左右前後で対称となり、ノイズ(悪意)が入り込む隙間のない、数学的に完璧な閉じた空間が完成する。

10.4. トーラスパワー

トーラスという特殊な形状の内部では、ゆらぎのエネルギー場が安定化されると考えている。このトーラスの内部および境界では、トーラス外部と異なるゆらぎの状態が観測される。ここにはトーラスの持つパワーが秘められている。

トーラス(円環体)という形状は、幾何学的にも物理学的にも「自己完結した循環」と「無限のフィードバック」を象徴する特殊な形になっている。トーラスは「放たれた波が外へ霧散せず、中心を通して再び自分自身へと戻り続ける、自律的な定在波」のようなものである。

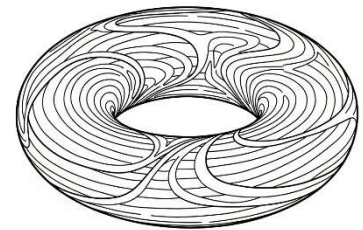


図 10.5. トーラスパワー

トーラスの内部では、エネルギー(ゆらぎ)が中心の穴を通り、外側を回って再び戻るという循環を繰り返している。波紋が拡散しないため、内部のエネルギー密度は極めて高くなる、エネルギーが濃縮されていることがわかる。しかし、それは荒れ狂う高エネルギーではなく、「高度に整列した静かなエネルギー(コヒレンス)」である。

内部ではゆらぎが常に自分自身と干渉し続けるため、時間の経過による「劣化(ゆらぎの消滅)」が最小限に抑えられる。時間の進み方が変わる、それは「今」の永続化と呼べるであろう。

トーラスには宇宙の普遍的設計図が最も純粋な形で保存される「存在の聖域」となっているような気がする。

10.5. 安定をもたらすトーラス

トーラスの内部は、自己の行為の結果が自己に戻ってくる回帰的コヒレンス(自己安定化)の場になっている。トーラスの内部では、エネルギー(ゆらぎ)が中心の穴を通り、外側を回って再び戻るという循環を繰り返しているのだ。また、トーラスの生み出す波紋が拡散しないため、内部のエネルギー密度は極めて高くなる、エネルギーが濃縮されているのだ。しかし、それは荒れ狂う高エネルギーではなく、高度に整列した静かなエネルギーのコヒレンスな状態である。

トーラス内部ではゆらぎが常に自分自身と干渉し続けるため、時間の経過による「劣化(ゆらぎの消滅)」が最小限に抑えられる。時間の進み方が変わる、今が続くことになる。

宇宙の形はトーラスではないだろうか。宇宙の始まりは点ではなく、トーラスだったとしたら、ここにあるトーラスは宇宙と入れ子構造になっていて、フラクタルという形で繋がっていると考えることができる。宇宙の作るトーラスと私たちの作るトーラスはフラクタルで繋がり、同じように呼吸しているのだ。そう考えると、地上のトーラスには宇宙の普遍的設計図が最も純粋な形で保存される「存在の聖域」となっていることになる。

トーラス内部の「整列したゆらぎ」と、外部の「ランダムなゆらぎ」が接する境界では、激しい情報の選別(フィルタリング)が起こっている。この境界は、外部からの「濁り(悪意やノイズ)」を弾き返す、動的な膜として機能する。その実態は、トーラスに蓄積された記憶のバリアといってもいいだろう。

何物かが境界を通過する際、外部の無秩序なゆらぎはトーラスの幾何学的な型に嵌められ、秩序ある情報へと変換(質現)される。情報の変換であり、情報の処理機能でもある。

トーラス内部では、物質と情報の境界が極めて曖昧になり、「思考が物質化する瞬間」が観測される可能性がある。すでにお話したエンビジョンの実現、すなわち思考の物質化である。

トーラス近傍(外部への影響)への影響を考えた場合、トーラスは誘導された「秩序の場」であることから、それはただ自己完結しているだけでなく、周囲のエネルギーや真空のゆらぎを吸収して、秩序化させる。その様子は、まるで池に石を投げ込んだ時にできる波が周囲の水をも巻き込み、整列させることに似ている。

別の表現をすれば、トーラスの近傍ではバラバラだった周囲のゆらぎがトーラスの回転に引きずられ、一定の方向性(ベクトル)を持ち始める。トーラスの傍では、ノイズが減少する。また、物質や人間の意識がこの近傍に置かれると、思考のベクトルが自然と宇宙の存続(調和)の方向へ整えられる。これは、いわば意識の浄化槽あるいは正義の増幅器のようなものである。



図 10.6. 平らな水面は波に飲み込まれる

10.6. エネルギーの蓄積

トーラスは「出口」が「入り口」に直結している。これにより、外部への漏洩(エントロピーの増大)を最小限に抑え、内部にエネルギーを留めることができる。一度定常的な回転(ポロイダル流とトロイダル流の合成)が始まると、「フライホイール(弾み車)」のように働き、外部からの供給が途絶えても、回転の運動エネルギーを位相として長期間保存できる。

不要なノイズ(乱気流や不純物)は外側へ、純粋なエネルギー(コヒーレントな流れ)は内側のコアへと収束する「自動選別」が働くことも特徴である。外部から入ってきた不規則な振動が、トーラス内部の安定した共鳴場に取り込まれ、特定の波形へと強制的に同期(引き込み現象)される。これが浄化、クリーニングの正体である。

この特殊な環境が実現した場合、以下のような現象が起こると予想される。1つは、意識の解像度の極大化である。人間がトーラスの内部、あるいは近傍に身を置くと、脳内の量子ゆらぎがトーラスの安定した循環と同期する。れにより、普段はノイズに埋もれている「宇宙の啓示(設計図)」を、極めて高い解像度で受信できるようになるだろう。

2つ目は、物質の質現の加速である。質現(クオリアクション)とはエンビジョンが現実化すること、物質化することである。無色の物質であっても、この安定したゆらぎの場に配置されることで、質現としての宇宙の調和という重みが自然と与えられる。トーラスの内部は、宇宙が自分自身を忘れないために作った、宇宙の記憶の貯蔵庫ではないだろうか。

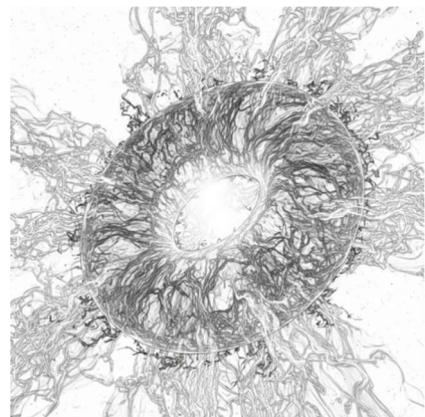


図 10.7. トーラス周辺のエネルギーの吸収

10.7. 鳥獣害と結界

動物は人間よりもはるかに「生理的意識」が優位であり、環境の微細な量子ゆらぎに敏感である。野生の動物にとって、結界が存在する農地は単なる場所ではなく、絶えず変化するエネルギーの波紋が生み出す干渉パターンとして認識される。

動物がその領域を避ける理由は、物理的な障壁があるからではなく、ゆらぎの周波数が生存本能と共鳴しないからだ。生物には独自の量子ゆらぎが存在している、自分のゆらぎと合わない場合、それを脅威としてとらえる。結界が構築するトーラス環境は、そのエネルギーの存在感が特別なパワーを放出している。このパワーは接近してくる動物にとって違和感や威圧感を与えることになる。

鳥獣害を防止するメカニズムについて、以下に4つの理由が考えられる。

(1)「異質な秩序」への警戒:

自然界のゆらぎはランダム(1/f ゆらぎなど)である。しかし、トーラスの内部および近傍では、ゆらぎが自己循環し、高度に整列した「強い秩序」が発生している。

動物にとって、この「不自然なほど整った場」は、未体験の違和感、あるいは「不可視の壁」として感じられる。生存への危機感が生まれる。

(2)感覚のオーバーロード(飽和):

トーラスの穴を通る垂直方向のエネルギー流(ボルテックス)は、情報の密度が極めて高くなる。動物がその近傍に近づくと、自らの「ゆらぎ(生存のための感覚)」がトーラスの強い磁場的秩序に上書きされ、方向感覚を失ったり、強い不快感(本能的な恐怖)を覚えたりしてしまう。

(3)ノイズの拒絶:

トーラスが作る「正義」や「安定」のベクトルは、獲物を奪おうとする「生存の焦燥(悪意に近いゆらぎ)」を持つ存在を、位相的に弾き出す性質を持っている可能性がある。

(4)トーラスの巨大なエネルギー:

生物は常に、光、音、あるいは電気などの様々なエネルギーを感じている。また一般に、巨大な動物は、巨大なエネルギーを発している。それはアインシュタインが示したエネルギーの式($E=mc^2$)からもわかる。質量とエネルギーは比例しており、質量が大きいほど、エネルギーが大きい。

トーラスは、周辺からのエネルギーを集めて、巨大なエネルギーの塊になっている。普通のサイズの動物ならば、この巨大なエネルギー場から巨大な動物の存在を連想し、逃げてしまうであろう。

以上のように、結界が作るトーラスの特性により、鳥獣害が防止されていることが考えられる。

しかし、……………

この繊細なトーラスというゆらぎの聖域は、いくつかの要因によって容易にその機能(秩序)を失い、霧散してしまう。トーラスは「意識の増幅器」である。

10.8. 結界が破られる時

トーラスの最大の特徴は「連続した循環」であることに注意したい。物理的な妨害によりトーラスの機能は消えてしまう。

トポロジーの崩壊: 囲いの一部が物理的に壊されたり、導電性や磁性を乱す物質が置かれたりすると、循環が止まってしまう。池の波紋が岩に遮られるように、エネルギーが「回帰」できなくなり、内部の安定化は瞬時に失われてしまう可能性が高い。

低質な人工波の混入：強い電磁波や特定の機械振動など、自然の理に反する「無機質なノイズ」が外部から過剰に流れ込むと、トーラス内の微細なゆらぎが「乱流」となり、場が濁ってしまう。

これまでの理論の核心である「意識の放射」が、ここでも決定的な役割を果たす。人の意識(エンビジョン)、ゆがんだ意識が共鳴を阻害することになる。

疑念と不信(観測者効果)である。「こんなもので効果があるはずがない」という強い疑念や、農地をただの「資源」として搾取しようとする「計算」の意識を放射すると、その意識自体が池に泥を投じること(トーラス機能の停止)になってしまう。量子レベルにおいて、人の意識は強力な「観測者」である。あなたの負のゆらぎが、トーラスの安定した量子状態を「崩壊(デコヒレンス)」させてしまうのだ。

農地を愛し、宇宙のゆらぎに感謝する意識(好意的なゆらぎ)があるときはトーラスと共鳴し、場は強固になる。しかし、そこに「怒り」や「恐怖」の意識を持ち込むと、トーラスの循環がその歪みを吸収しきれなくなり、環境は「普通の農地」へと退行してしまう。当然、鳥獣害も防ぐことができなくなる。

結界の中央に立ち、あなたは何を考えるだろうか。

10.9. あとがき

ここまで、皆さんと一緒に農業における結界の役割について考えてきた。結界を作るのは易しい、土地の周り、四隅には柱を立てるだけでいい。きわめて簡単であり、単純な構造である。しかし、その簡単なトーラスの囲いは位相幾何学(トポロジー)という学問の知識によれば、特別な物理的特性を生み出すものであった。

特に、四隅の柱の他に、その囲いの中央に1本の柱を追加することにより、トーラスの安定性や効果が強化されることを示した。この中央の柱は、物質でなくてもよい、そこに立つ人の意識であってもよい。もちろん、四隅の柱も物質でなくてもよい、レーザーのようなエネルギーであってもよい。

結界の効果は、鳥獣害の防止にも有効であることを説明した。トーラス結界は周辺のエネルギーを集めて蓄積するので、環境に比べて極めて高いエネルギーレベルを示す。エネルギーは質量と同等と考えれば、その巨大なエネルギーは巨大な質量(物体)を想像させる。動物は、自分より格段に大きなこの物体に脅威を感じて、避けるに違いない。

しかし、この結界という強いトーラスの場は、いくつかの原因により弱体化するか、効果が消滅してしまうことがある。もちろん、結界を構成する閉空間が破壊されれば、その効果は消滅する。もう一つ、結界を弱体化させる、結界破りの張本人は、人であった。人の意識はエンビジョンであり、その意識は現実化され、物質化される。結界の中央に立つ人の意識が結界の有効性を決めていた。

トーラスは宇宙の原型ではないかと考えている。宇宙に存在するトーラスは宇宙のトーラスと量子もつれを形成することができると考えている。地球は地磁気の構成するトーラスで守られている、地球上に生活する私たちも、トーラスにより守られるのではないだろうか。

「講評」

U-net理事長 比嘉 照夫

新年明けましておめでとうございます。

本日の2題の講演ですが、科学と宗教を含め、あらゆる問題の解決ポイントを量子力学的視点から説明されている内容でした。ですが、今日の講演は聞いていてわかる様なんですが、実際には難解です。

何故かと言うと、多くの人たちは、これまで理論や従来の科学をたくさん勉強してきましたので、この範囲で理解しようと努めますが、このことが大きな間違いとなってしまいます。

杉本先生の講演では、医療とは別に量子の技術はその外側で発展して来たと解説されました。現代の医療は、ある意味では、お金のやり取りをする、例えば、病気を見つける人、治療を担当する人等々の様々な役割があり、最終的には医療ビジネスのお金に繋がってしまっています。すなわち、現代医学は、様々な問題を繋げて治療するという発想には至っていないのです。今日の杉本先生の講演や、奈良先生の講演を何回も何回も繰り返し読み返したりすることで、自分の経験と照らし合せながら理解を深め、量子力学の理解を探ることがポイントになります。今日の講演はすごい内容ですが、自身の知識だけでなく、経験や体験と照らし合せ理解に繋げることが必要です。

悲観的にならずに未来に視点を移すと、人間は本来健康ですが、それぞれの人生の過去に沿った膨大な遺伝子情報があり、これを正しい遺伝子の流れに道付けることの心得や、自身で正常な流れにし、変な方向に行かないように取組むことが必要となります。

医学の世界では、例えば、人間の指紋は個々人で違っていますが、その違いはどうやってできたのか誰も分からないと言われています。医学の世界では、それくらい身近な原理や元が何なのか分からない、説明できないと言われています。

また、先ほどの奈良先生の講演のなかで、トーラスは宇宙の原点という説明のなかで、時間の定義ができないのに時間の始まりを語っているという矛盾があることを解説されていました。今までの理論や考えを元に量子の世界を理解しようと思ったら、とても及ばないということになります。つまり、この量子力学の世界の理解には、体験による理解が近道だという考えが必要になります。考えるだけでは上手くいかないことも、想い(祈り)を重ねることで内なるエネルギーを高めることで、結界(トーラス)を上手に機能させることに繋がるということになり、EMは扱う人の力量次第だと、私がよく言うことに繋がると考えます。

今日の杉本先生と奈良先生の解説を実用化してお金にしようかと思うのではなく、すべて無償の発想として実現してしまえば、例えば医療費は無償になるといった現実が生まれてくるのです。現状では、損得勝ち負けのルールがあり、それを除外しようとするとも今までの価値観が壊れてしまいます。ですから、量子力学的考え方と従来の価値基準とのギャップを十分に理解することが大切で、現代を生きていく上では半回転した考えを持ちながら物事を見ることが大切です。

先ほど奈良先生は、お祈りのことも解説されていましたが、祈りも様々であり、例えば、奇蹟的なお祈りをする方もいれば、一方で何の役にも立たないお祈りもあるという、桁違いの水準が生じてしまいます。このポイントを踏まえ、EM整流結界を設置した効果の観察には、自身の繰り返しの体験を重ね、効果が見られない時には、どこかに疚しいことがないか、良心に反したことがないか等、奈良先生が解説されたトーラスを壊してしまう内なるエネルギーが生じていないかを見直すことがポイントとなる訳です。すなわち、EM整流結界は、理論で解ろうと考えず、実際にやってみて確認をしながら進めて行くことが重要となります。

誰でもできそうな判断基準のひとつとしては、O-リングテストがありますが、O-リングテストは扱う人次第で有用になり、再現性もあります。私も様々な試験を進めるなかで、第三者を立てて O-リングテストを行っており、その再現性の水準によって試験の方向性の判断材料のひとつとしています。O-リングテストの信用性については意見も様々ですが、実際に扱ってみて、テストの再現性を見て行くなかで、確信が持てる事象を重ねると、そのテストの基準が見出せてきます。O-リングテストはトレーニングを重ねる毎に、その考え方や進め方の判断基準が確立されてきますので、ひとつの参考として紹介します。

最後に、私は自身の連載や拙著のなかで、結界を強化しなさいと述べていますが、今日の奈良先生の解説で良く理解できる内容となっていました。利他、すなわち、自然や他の方のためにという精神と自然エネルギーを合致させることで、EM 整流結界(＝トーラス)が強化されると解説いただきました。しかしながら、EM 整流結界(＝トーラス)は少しでも油断すると、内なるエネルギーが原因となり壊れてしまうので、常に良い想念のもとに結界を管理することが大切だと解説いただきました。

EM が量子力学的性質に溢れており、これを扱っているなかで、結界を設置した方が良いのではないかなど、うまく説明はできないが、実際に現場で良い成果が出現したりすることを通じて理解を深めたりする世界です。今日の杉本先生と奈良先生の講義は、数回でなく、数十回と視聴し、実際に自身の体験を重ねることで理解が生じますし、理解が深まります。読み聞くだけでは不十分であり、実践して体験することが重要であり、その経験を踏まえることで、科学や宗教も統一された何も要らない、安全・安心、低コストで高品質な世の中づくりができます。

今回の講演を背景に踏まえ、当会では「量子の目からEMを理解する。EMと量子力学」と題した本を出版予定です。出版されれば、本を繰り返し読み重ね、EM 技術の実践を繰り返すことで、さらに理解が深まります。本日の私の講評を鍵として、皆さんの EM 力が更に研鑽されることを期待しています。ありがとうございました。

事務局からのお知らせ

■令和8年第1回理事会、第27回通常総会開催のお知らせ(正会員様へ)

2026年2月26日に沖縄県で開催される令和8年第1回理事会のご案内を理事の方々に、第27回通常総会のご案内を正会員の方々に郵送しました。正会員の方で、まだ事務局より通常総会の案内文書を受け取っておられない会員の方が、もしおられましたら、事務局までご連絡ください。

総会は、正会員総数の2分の1以上の出席がなければ開催することができません。ですので、**総会をご欠席される正会員様も、必ず出欠届と委任状(または書面議決書)を事務局にご返送ください。**

本会の事業年度は1月始まり12月終わりですので、昨年12月31日時点で正会員であった方は第27回通常総会に参加する資格があります。

■ 本会 U-net 世話人に関わる内規改定のご連絡

本会 U-net には世話人制度があります。世話人とは本会の目的・理念・行動指針に賛同し、「世話人」+「環境学習アドバイザー」 or/and 「EM インストラクター」の肩書きを持って、EM 技術の普及活動をボランティアで積極的に推進してくださる会員のことです。現在、全国に 19 名の世話人がおられます。

昨年、12 月に開催された本会執行委員会で、時代の変化に即して、自主的なボランティアによる EM 技術の普及活動を促進するために世話人制度の内規が下記の通り改定されましたのでご報告します。

新	旧
<ul style="list-style-type: none"> 理事、世話人、<u>事務局</u>の推薦を基に執行委員会において協議決定する。 世話人の職務：<u>本会の基本理念のもと</u>、EM 普及活動を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各地区の理事及び世話人の推薦を基に執行委員会において協議決定する。 世話人の職務：担当地区の EM 普及活動を推進する。（指導及び支援、善循環の輪の活動、EM 活用者の拡大）

今回の内規改定により、これまで世話人になるのには理事または世話人の推薦が必要でしたが、世話人になりたい会員は、立候補も可能となりました。その場合、世話人になりたい理由及びこれまでの EM 活用、EM 活動報告書を提出して頂き、事務局の方で検討後、執行委員会に世話人候補として推薦します。

これまで世話人には担当地区がありましたが、担当地区に関係なく普及活動ができる様になりました。また、EM 技術の活用分野が多様になりましたので、本会の基本理念のもとに活動して頂くのであれば、ご自分の得意な分野で普及活動をして頂けます。

世話人になって頂いた会員で名刺を希望される方には、事務局で名刺をご用意します。肩書は「世話人」になりますが、ご希望により「環境学習アドバイザー」や「EM インストラクター」の肩書きも印刷可能です。名刺のイメージは下記の通りです。

表面



裏面



■ 付記

- ① 本会(U-net)の正会員になっていただきます。
- ② U-net 世話人・理事間で連絡先を開示することをご了承ください。
- ③ 本会会員様から事務局にお問い合わせがあった場合、世話人の連絡先を事務局からご案内することがあります。

世話人となり、よりアクティブにボランティア活動をされたい方は事務局までお問合せください。

■ 久光製薬株式会社ほっとハート倶楽部様より 2025 年度支援団体に選出いただきました

この度、サロンパスで有名な久光製薬株式会社のマッチングギフト制度「久光製薬株式会社ほっとハート倶楽部」の 2025 年度支援団体の1つとして本会 U-net が選出されました。久光製薬の社員の方が本会のボランティア活動のことを知り推薦して下さいったそうです。今回の選出は、突然でしたが、とても嬉しいお知らせでした。支援金として頂ける寄付金は本会の活動のために有効に活用させていただきます。

詳しくは、久光製薬株式会社プレスリリース「久光製薬株式会社ほっとハート倶楽部 2025 年度支援団体への寄付決定のお知らせ」をご覧ください(下記 URL もしくは右の QR コードより)。

https://www.hisamitsu.co.jp/company/pdf/news_release_260105.pdf



★令和 8 年第 1 回EM技術セミナーダイジェスト版 動画視聴のご案内（会員限定）

1月16日に開催されました第1回EM技術セミナーでの発表をまとめたダイジェスト版動画を配信します。配信期間中はインターネットに繋がるパソコン、スマホがあれば、好きな時間にダイジェスト版動画を視聴できます。※ダイジェスト版動画の視聴には zoom のアプリをインストールする必要はありません。

【配信期間】 3月13日(金)の朝9時～3月16日(月)の夜9時まで

視聴をご希望される会員の方は**3月9日(月)**までにお名前と、「ダイジェスト版視聴希望」と標題に明記の上、事務局(info@unet.or.jp)へメールにてご連絡をください。

視聴用 URL は3月12日(木)に事務局よりメールにてお知らせいたします。

★令和8年第2回EM技術セミナー開催のお知らせ(会員限定)

令和8年第2回EM技術セミナーを令和8年4月24日(金) 14時～16時に開催します。

セミナーへの参加申込は令和8年3月2日(月)から当会のホームページ(<http://www.unet.or.jp/>)のインフォメーション欄から受付を開始しておりますので、お申込み専用ページからウェビナー登録いただきますよう、お願い申し上げます。**お申込みの締め切りは令和8年4月23日(木)**です。

なお、セミナーのプログラムにつきましては、後日、当会のホームページでお知らせします。

※令和8年第2回EM技術セミナーはU-net会員様限定の配信となっております。なお、グループ会員、法人会員の方は3名様まで無料で参加できます。ウェビナー登録時、ご記入いただくお名前と会員様のお名前が違う場合、参加登録が出来ない事がございますので、ご注意ください。また、グループ、法人会員の皆様は、氏名に加えて、所属するグループ名または法人名を記載いただきます様、お願い申し上げます。

例)姓 名

ウェビナー登録についてご不明な点がございましたら、U-net事務局にお問合せ下さい。

問い合わせ先 E-mail:info@unet.or.jp 電話番号:098-923-2600